

---

# 召喚しちゃいました（はあと）

泉 飛白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

召喚しちゃいました（はあと）

### 【Nコード】

N6276U

### 【作者名】

泉 飛白

### 【あらすじ】

召喚してしまったらしいレインボー・ミラクルと堂々と偽名を名乗った絶世の美女に振り回されることになってしまった八神<sup>やがみ</sup> 九重<sup>このえ</sup>の序章の話。

俺はマジで興味本位だった。

オカルトには興味ねえんだが親友に付き合っつて、オカルト検証研究会、という非現実的な部活動に入ったのがそもその間違いだつた。

まばゆい光に目を閉じた次の瞬間には魔法陣のあつた上にいた。

「…責任持つて儂を養え、ぼんくら」

言葉が出なかった。まさに俺の目の前には女神ではないかと疑ったほど美しく整った造形をした完璧な女性は、その端正な顔を一ミリも動くことなく喋った？

いや、喋ったら唇が動くはずだし、まさかの腹話術とか？

「貴様のその耳は作りもんかえ？」

嘘みたいだがその声は酷く心地良くてすんなりと浸透するような甘い囁きに聞こえたように思えた。だが、酷く年寄り臭い？

「儂の余りの美しさに心の臓が止まったか。不憫よな、まだ若いと見える」

「死んでねえよ、勝手に俺殺すんじゃねえよ、ババア！」

あ、やべー。年寄り臭いとか思った矢先だったからつい。

美しい白銀の長い髪がユラツと揺れたのは身体が後ろに半歩後ず

さつたからだ。丸く見開いた瞳は深い紅。瑞々しいふつくらとした紅い唇は微かに開いている。

なのに恐ろしくそれ以外は動かない。

「なんだ。お主は儂の言葉が解つとつたんか」

「ババア発言はスルーッ!？」

「否定できんからな。馬鹿でなさそうで安心じゃよ。存分に儂の奴隷として死ぬ気で働けるな」

誰が奴隷だ! と怒鳴り散らかしたい所だが俺の興味本位でこんなことになつちまつたんだよなとか考えると口ごもつちまう。

断じて奴隷を認めたわけじゃねから。

それと表情もすぐに人形みたいな表情に戻つたがどっちもさして変わんねえな。まるで本当に女神とか思ったが、こんなナルシストがそんなことねえ。

どっちかと言うと悪魔とかか? だって魔法陣ってなんかそんなイメージしかねえしな。部活動も聞き逃してたし。

「テメエを帰すまでは養つてやるが…俺は奴隷なんかなんねえからな。後、お前つて悪魔か?」

「…くっ、お主、馬鹿?」

腹を抱えて笑いそうな声な癖に無表情なソイツに腹が立った。

「殴つていいか。俺なんかスツゲ腹立つたんですけどお」

「殺すぞ、はあと」

なぜ、はあと、って口で言ったんだ、舐めてんのか、ああん？  
もう青筋浮かんでる気がするぜ？

「血管が切れるぞ若造」

「だああれえのせいだと思ってんだっ、この糞アマがーっ！」

近所迷惑考えずに叫んで悪いが、俺にはそれ以外で怒りをぶつけることができなかった。

マジで死ぬ。

憤死とか笑えねー！。

「僕はレインボー・ミラクルじゃ、よろしく頼む。キラッ」

「偽名だろおーっっ！」

ヨーッ！  
いちいちなんで俺がイライラしなきゃなんねえんだ、コンチキシ

つか、その身体自体が偽もんだろ！？一ミリも微動だにしない  
ってんじゃねえかよ、怖えよ！

「つか、最後のマジでイラッとくんですけどお！」

「怒りっぽいと早死にじゃ、笑え小童よ」

「っ、笑えるかあああっ！！！」

どうやら俺は疫病神でも召喚しちまったみたいだ。この後に怒鳴り込みの如く強面の管理人が苦情を言ってきた。

「お主、名は何じゃ？」

「お前なんか呼ばせる名前なんか持ち合わせてねえよ」

「連れぬこと言うな、無責任にも程があるよな。いたいけな僕はお主しか頼るもんがないとゆうに…しくしく」

気が抜ける。というか、もう疲労がピークに達したんじゃないのか？

相も変わらず無表情というか、マジでコイツどうやって話してんだよ…。取りあえず俺は深く溜め息を吐くことにした。

有り得ないくらいの美女と出遭った俺、八神 九重《やがみ このえ》の災厄はこの日から始まったんだと思う。

あれからちょうど1週間はマジで疲労が絶えなかった。あの偽名としか思えない名前を素直に呼べないからレイと略した。

出遭い初日は夕方だったがすでに飯は食ったと言ったレイは早々に俺のベッドに入り寝た。勿論、俺の許可なし。仕方なく俺は床で予備毛布で寝た。

「悩むと禿げるぞ？」

「ハゲたらお前のせいだ」 レイは無表情の顔は相変わらずなんだが何とか口は動かしてもらった。今も思い出すと目線は遠く彼方だ。

魔法、魔術？

まあ、非科学的な事が出来るレイはこちらの常識を覚える気がないみたいで腹立つけど光熱費が浮く。間違っても他人には見せられないけど…

「お主は注文が多いが欲がないのう」  
「……喋り方」

その古臭い喋り方も注意した、唇を動かすようにも言った、攻撃系は勿論、過度な力の使いすぎはマジで厳禁！

こんな異世界でそんな力使って副作用でも出たら困る。

「ほんに厳しい旦那様じゃな」

「旦那様じゃねえ、九重だ」

「ココノエはわたくしが嫌いのですか？」

ずいっと顔が近づき無表情でも綺麗な顔とその顔からは想像できないくらい甘く優しく切ない声が俺の思考を溶かすように侵していく。

「気持ち悪い寄るな、レイ」

「お主は不能なのかえ？」

常々気になつとつたえ、とのんびりとした声にピクリと顔が引きつる。俺だつて彼女の1人や2人…いや1人でも欲しいと思ってるし、年頃の男子だ。

「怒鳴るぞ、この野郎があ、ああん？」

「僕は女じゃ。ヤローじゃなくアマよ」

ふふ、と確かに笑う声に俺は脱力する。馬鹿らしくて仕方ない。

レイは構うと調子乗るから放つとくかとか思うが、放つとくと不機嫌になるから扱いにくいんだよなあ。

「もう、疲れる」

「…僕はやはり居なくなるべきよな」

「勝手にいなくなるなよ。マジで心配すつから」

こつちが勝手に喚びだしておいて投げ出すのは趣味じゃねえし。

第一、間違つて逮捕されたらどうなることか。そう思つと俺は真剣にレイに伝えた。

「…お主は女子《おなご》を誑かすのが好きかえ?」「変な事いうな。俺に誑かされる女がいたら俺の人生はハッピーライフだ…」

「顔は存外整つておると思うがのう」

「イヤミか?」

お前程整つた面したヤツはこの地球上にはいないぜ、マジで。しかも、存外つてなんだ。やっぱりケンカ売つてんのか?

イライラするが、そんなにこのやり取りが嫌だとか思つてない。落ち着くし、おかえりとか行つてらっしゃいとか言われるのは嬉しい。

「そだ。これ百々《どど》さんから」

「おお、これはあの隠れ名店のシヨコラではないかえ!？」

因みに百々さんつてのはこのマンションの強面の管理人でレイの猫被りの第一被害者だ。

レイの美貌に今や骨抜きで、これまた強面の知り合いの菓子で餌付け。

俺は絶対にあそこは隠れ名店ではないと思つてるが、口にしたら

朝日が見れなくなりそうなので言っていない。

世の中には知らなくて良いことが沢山あるんだ、と心の中で思った。何よりあの強面の管理人である百々さんが好感的になったところだけが幸いだった。

レイは一応は俺の姉になってる。ま、とんでもなく有り得ないし良くわからんがレイが何かやらかしたのは確かだ。

「うまいのう」

幸せそうだが、やっぱり無表情だ。

どうにかならないのかよ、その表情はと思ったが、ヘタに笑みでも浮かべたら色々と危なそうだから今がベストだな。

あ、と何かを思い出したかのようにポンと手を打ったレイにマジで嫌な予感しかない俺。

「俺は…いや、わたくしは外に出てみたい」

「百々さんで行っただろ、名店」

正直、行きたくはない。

理由を付けるならこの腐っても美女なレイをつれて街を歩いてみる。男の嫉妬の視線や喧嘩を売られるに決まってる。

前は百々さんがいて人通りのない場所を通ったから事なきをえたが、今度はそうじゃない。

「巷《ちまた》で人気のスイーツを食いたいのじゃ」

あ、素直に言ったよ。まったく、誰だよレイに甘いもん食わせたのは…百々さんだった。女の子…甘いもんが好きだと思った百々さんの有り難迷惑。

甘いもんの引き合いに出せば大人しくなるから適量与えればすぐにお寝むだ。

つか、今更だがコイツ幾つ？

「僕はあんな美味い物はないと思っておるのじゃ。だから、死ぬ前に甘くてとろけるような口溶けのスイーツを食したいのえ」

「お前つて口調さだまってねえな」

「…キャラ設定がまだ完全じゃないのじゃ。今流行の「すんな！」

いい加減表情の一つでも覚ええないのか、コイツ。レイ、レインボ―・ミラクルなんて馬鹿みたいな偽名を名乗った割にはダメだ。

しかも、ちょっと古いチョイスをするに違いない。

「駄目かえ？」

「…わかった。魔法禁止、店は一軒、店で食うのは一つ、持ち帰り可、迷子禁止で俺以外の奴にはモノ貰うな、付いていくな」

見た目が良い分に悪目立ちになるだろうが行けないことはない。俺は最後まで面倒は見るともりだし、責任感もあるがそれ以上にレイが心配なんだ。

それは出遭って2日目のことだった。現実打ちのめされた俺は

その夜、風呂上がりのレイに出遭った。

「なんで素っ裸なんだああっ!!」

「服がなかったからじゃな」

「っ、か、隠せえ!」

ヤバイめにあつた。毛布投げつけて俺は自分の未使用の服を渡した。まあ言わずとドアの隙間から。

その後はネットでレイに安めの服を選ばせて俺の切り詰めた金で買った。

「お前には恥じらないのかよ、一応女だろ?」

「僕はただお主の言う通りにしただけじゃから非はないじゃろ?」

「普通は男に裸見られたら嫌だろっ」

年頃なんだぞ、俺!? 普通は隠すなりあるだろうが!

「それくらいで恥ずかしがるなど、お主は意外に初よなあ」

「…こ、殺す!」

「ふふ、青いのっ」

こんな奴見捨てれば良かった、と心底後悔した。こんな奴といたら俺は人間として駄目になりそうだとこの時に俺は確信した。

そんなことをするレイは何をしでかすかなんてわからない。  
目を光らせとかねえとか思っていたらレイは優しげに微笑んだ。

一瞬で時が止まったような錯覚に陥る俺を気にもとめないレイは  
謝罪で俺の日常が消えた。

「お主なら俺の世界を救ってくれるじゃろっ」

眩い輝きに包まれ俺は地球から姿を消して、見渡す限りの大自然  
にいた。

「俺は力が弱まり救えん。俺の代わりにこの世界を正してほしいの  
じゃ」

「なんじゃこりゃああーっっ!」

「…召喚しちやいました、はあと」

やはり無表情な能面でそう言ったレイをぶん殴りたくなったのは  
しょうがない。

俺、八神 九重のファンタジー異世界での旅はこうして始まるこ  
とになった。

(後書き)

長編予定でしたが短編に無理やりしました。

一番始めに投稿してソッコー下げた小説が短編になって帰ってくるなんて素晴らしいね。

邪魔だから投稿しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6276u/>

---

召喚しちゃいました（はあと）

2011年7月12日12時44分発行